

イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。私に良いことをしてくれたのだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、私はいつも一緒にいるわけではない。この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もって私の体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。よく言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」（マルコ福音書14章6節～9節）

主イエスはベタニアの規定の病を患っているシモンの家で、食事の席についておられた。規定の病とは、新共同訳聖書では「重い皮膚病」と訳され、ハンセン病ではないが、感染すると恐ろしがられていた皮膚病である。規定の病を負った者は他人と交わることを禁止され、共同体から排除されていた。主イエスは、規定の病を負うシモンを排除せず、彼の家の客となり、食事の席についておられた。その時、「一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、その壺を壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。」ナルドはヒマラヤに自生し、根から高価な香油が取れた。娘たちはナルドの香油を買い蓄えて、結婚する時、持参品とした。婚家に歓待すべき人が見えた時、少量のナルドの香油を頭に注ぎ、香しい香りで歓迎の意を表した。また、家族に死者が出た場合、遺体に香油を丁寧に塗って、埋葬した。

さて、食事の席に、一人の女性がナルドの香油の入った壺を持って来て、壺を壊し、席に着いていたおられた主イエスの頭に一気に注ぎかけた。誰も経験したことのない豊かで高貴なナルドの香油の香りが部屋中に充満した。すると、ある人々が憤慨し、「何のために香油をこんなに無駄にするのか。この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに」と言い、彼女を厳しく咎めた。一デナリオンは一日の生活費にあたり、「三百デナリオン以上」は一年分の生活費に当たる。彼女は、大変高価なナルドの香油を惜しげもなく注いだ訳である。もったいない。貧しい人への施しは主イエスが常に実践されていたことで、ナルドの香油を売って金に換えれば、多くの人に施せる。これは正論であろう。主イエスは、「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。私に良いことをしてくれたのだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、私はいつも一緒にいるわけではない。この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もって私の体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。よく言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう」と言われた。貧しい人々はいつもいるから、施しをしたい時にはすることができる。しかし、私はいつまでも一緒にいる訳ではないと、既に自分の死の予告をされていて、すぐに別れの時が来ると表明しておられる。ところが弟子たちは、神の国の宣教を共にして来たにもかかわらず、誰一人、主イエスを理解せず、あらぬ政治的野心に燃えていた。その中で彼女だけは、主イエスの言葉と振舞いから死に逝かれると悟った。お別れの時が来ると知った時、彼女は最大の愛を捧げたかった。それは、埋葬の準備としての香油を注ぐことであった。弟子たちも理解しない、主イエスの孤独感に彼女の香油注ぎによって慰められ、励まされた。彼女は主イエスを愛して、主イエスの心と時を知るように導かれた。そして、常軌を逸した愛で応答したのである。